

藤崎遺跡22

- 藤崎遺跡第39次調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1463集

2022

福岡市教育委員会

ふじさき
藤崎遺跡 22

—藤崎遺跡第39次調査報告—

福岡市埋蔵文化財調査報告書第1463集



調査番号 1955

遺跡略号 FUA-39

2022

福岡市教育委員会

序

玄界灘に面して広がる福岡市には豊かな歴史と自然が残されており、これを後世に伝えていくことは現代に生きる我々の重要な務めであります。

福岡市教育委員会では近年の開発事業に伴い、やむをえず失われていく埋蔵文化財について事前に発掘調査を実施し、記録保存に努めています。

本書は共同住宅建設工事に伴う藤崎遺跡第39次調査について報告するものです。調査では弥生時代の甕棺と古墳時代の土坑などが出土し遺跡の広がりの一端を明らかにすることができました。古墳時代の土坑からは釣針など鉄製品も出土しています。

本書が文化財保護へのご理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究の資料としてもご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、積水ハウス株式会社様をはじめとする関係各位には発掘調査から本書の刊行に至るまでご理解とご協力を賜りました。厚く御礼申し上げます。

令和4年3月24日

福岡市教育委員会

教育長 星子明夫

例　言

1. 本書は共同住宅建設にともない実施した藤崎遺跡第39次調査の報告書である。
2. 本書に使用した方位はすべて座標北で、座標は世界測地系による。
3. 検出遺構には検出順に3桁の連番号を与え、性格を示す記号として、ST（甕棺墓）、SK（土坑）、SP（ピット）を頭に付した。
4. 掲載した遺物の番号は通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。
5. 本書に掲載した遺構図は池田祐司が作成した。
6. 本書に掲載した遺物の実測図は熊塙御堂和香子と池田が作成した。
7. 本書に掲載した挿図の製図は池田が行った。
8. 本書に掲載した写真は鉄製品のX線・マイクロスコープ写真撮影を福岡市埋蔵文化財センターの藤崎彩乃が、他は池田が撮影した。
9. 本書の編集・執筆は池田が行った。
10. 本書に係わる記録類、遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管されるので活用されたい。

本　文　目　次

I	はじめに.....	1
1	調査に至る経緯.....	1
2	調査組織.....	1
II	立地と周辺の調査.....	1
III	調査の記録.....	4
1	調査の工程.....	4
2	調査の概要.....	4
3	土層.....	5
4	甕棺墓.....	5
5	土坑.....	10
6	煉瓦積遺構.....	20
7	そのほかの遺物.....	20
8	終わりに.....	21

遺跡名	藤崎遺跡	調査次数	39次	調査略号	FUA-39
調査番号	1955	分布地図図幅名	81 室見	遺跡登録番号	0307
申請地面積	638.38m ²	調査対象面積	101.53m ²	調査面積	113m ²
調査期間	2020 02 10 ~ 2020 02 28			事前番号	2019-2-205
調査地	早良区百道 1 丁目 807 番 10				

I はじめに

1 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、早良区百道1丁目807番10における共同住宅建設に伴う埋蔵文化財の有無の照会を令和元(2019)年5月27日付けで受理した(2019-2-205)。申請地は周知の埋蔵文化財包蔵地である藤崎遺跡の範囲であり、令和元年9月30日に敷地北側の機械駐車場計画箇所で確認調査を実施し地表下200cmで遺構を確認した。この結果を受けて埋蔵文化財課は申請者に対して遺構が存在する旨の回答を行い、その取扱いについて協議を行った。その結果、予定建築物の構造および造成計画上、工事による遺構への影響が避けられないため、令和元年度に発掘調査、同2・3年度に整理・報告を行い、記録保存を図ることで合意し委託契約を締結した。申請地638.38m²のうち調査対象としたのは工事で埋蔵文化財に影響がある機械駐車場部分101.53m²である。なお南側の共同住宅建設計画範囲には既存建物があり、その解体時に立ち会いを行い、以前の基礎工事のため遺構面が攢乱されていることを確認した。機械駐車場と共同住宅建設の間の約4.5mと西側からの進入路部分については未調査範囲で遺跡は残る。

発掘調査は令和元(2019)年2月10日から2月23日に実施した(調査番号1955)。調査面積は工事範囲に設置された土留矢板内の113m²で、遺物はコンテナケース15箱分が出土した。

2 調査組織

調査委託 積水ハウス株式会社

調査主体 福岡市教育委員会

調査統括 文化財活用部埋蔵文化財課

課長 菅波正人

調査第1係長 吉武学

庶務担当 文化財活用部文化財活用課

松原加奈枝

事前審査 文化財活用部埋蔵文化財課

田上勇一郎 山本晃平

調査担当 文化財活用部埋蔵文化財課

池田祐司

II 立地と周辺の調査

藤崎遺跡は早良平野北端の博多湾に面した海岸砂丘上に立地する。この砂丘は藻川と室見川間の2.5kmに連続し、途中樋井川で分断される。この砂丘の西側、樋井川より西には西新町遺跡、藤崎遺跡が広がり、特に弥生時代以降の集落、墓地の遺構が確認されている。令和2年には、樋井川東側の鳥飼遺跡で弥生土器が出土し、この時期の遺跡の存在が明らかになった。

藤崎遺跡は明治45(1912)年に箱式石棺から鏡頭太刀が出土し、昭和5(1930)年には弥生前期の壺が出土するなど古くから知られてきた。昭和51(1976)年から同53(1978)年にかけての地下鉄1号線建設に伴って実施された全長300mにわたる調査では、藤崎交差点を中心に弥生時代の窓棺墓91基が確認された。その後、今日まで39次の調査が行われ、弥生時代から古墳前期の遺構は東西450m、南北150mに展開することが確認されている。

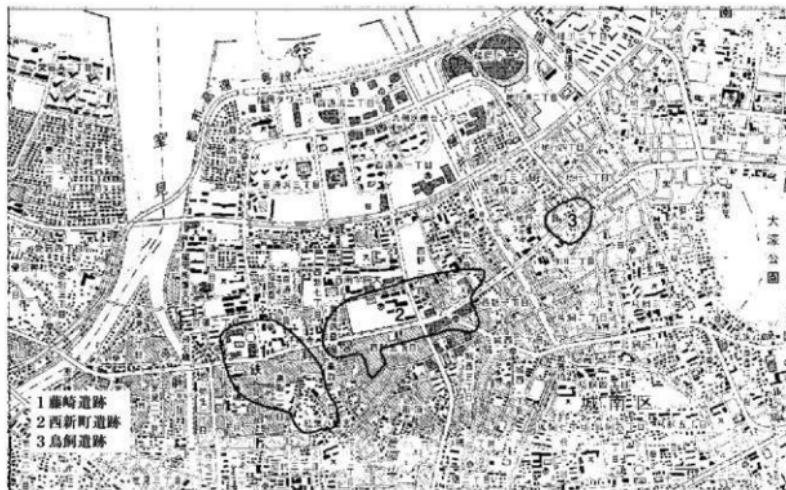


図1 遺跡位置図 (1/25000) 国土地理院 25万分1地形図を加工して作成

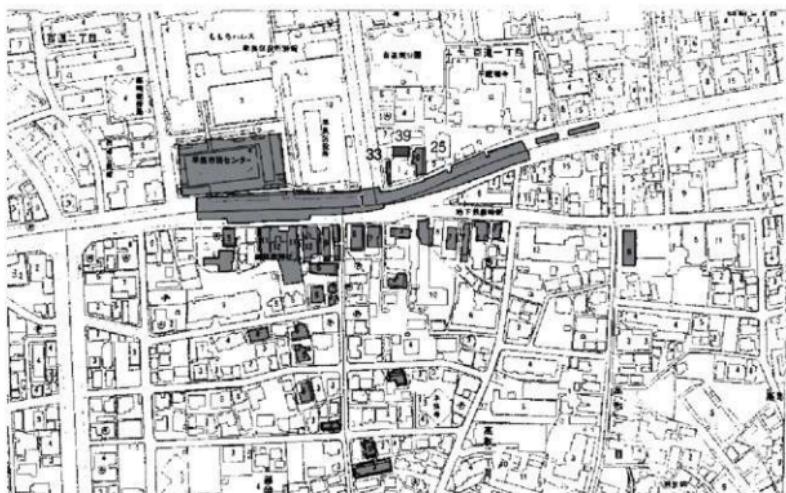
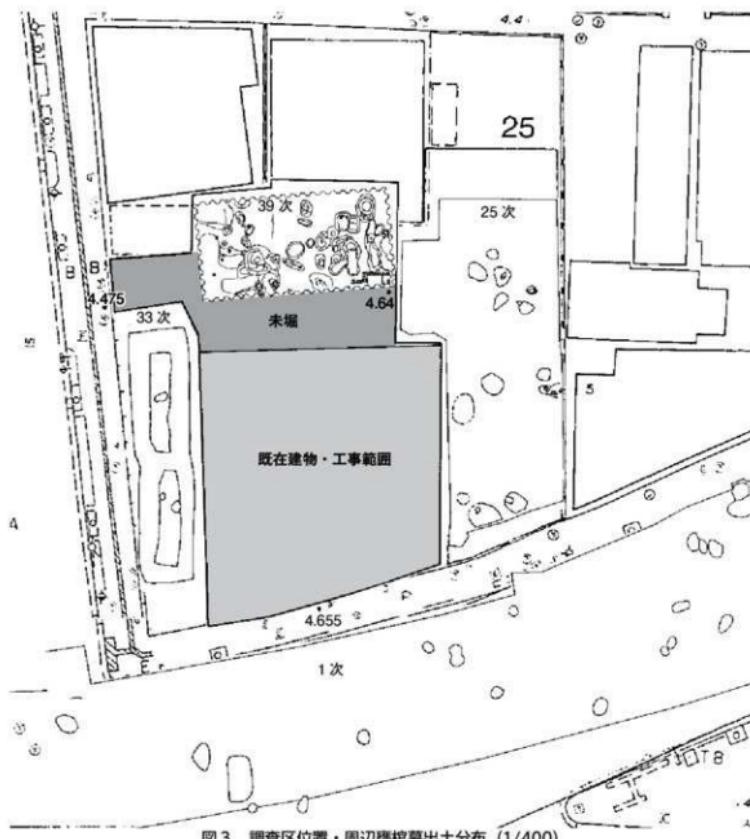


図2 調査地点位置図 (1/4000)



これまで確認されている壙棺は藤崎交差点を中心に東西 90 m、南北 30 mほどに分布し、今回の39次地点はその北東部にあたる(図19)。東西両側で実施された25次、33次調査でも弥生中期の壙棺が確認されている。25次地点では弥生中期の壙棺 12 基が確認され、調査区南端で出土した 1 基が大型棺である他は小型棺である。33次調査では中期中頃の 3 基はいずれも小型棺である。

参考文献

常松幹雄 2016「西新町遺跡／藤崎遺跡」 新修福岡市史 資料編考古 1

甘本市史編さん委員会 1981「製陶業の浮沈」『甘本市史(下)』164 頁

北九州市芸術文化振興財团 2010「壙擣鉢」「室町遺跡第 11 地点」北九州市埋蔵文化財調査報告書第 442 集 208 頁

III 調査の記録

1 調査工程

調査範囲は東西に長い対象地のうち、北端に建設される機械駐車場の工事範囲に設置された土留矢板内である。事前の確認調査で調査区西端に南北方向のトレンチを開け、地表下約2mの白色砂上面で黒色砂の遺構と弥生土器を確認している。矢板設置後は、試掘結果に基づいて重機による搅乱土壤を2mほど除去する工程に立ち会い、東側で約120mの搅乱土壤を除去したやや濁った黄白色砂の面で弥生土器と淡茶色砂の遺構を検出し、これを調査面とした。遺構面までの土砂搬出の後、矢板内には地中梁が南北に2本設置された。この地中梁は遺構面から約60cmの位置にあたり、作業の支障となるため、地中梁を境に西から1、2、3区（写真3～5）として、区画を目途に作業を行った。また、遺構面と地表面の比高差が1.2m以上あり、遺構掘削排土の搬出に困難があった。重機による排土の途中搬出が1回予定されていたため、1、3区の掘削土を2区に止め、重機による排土搬出の後に2区の調査を行った。

土留矢板工事が2月4日まで、遺構面までの搅乱土壤の搬出が2月5日。地中梁設置後の7日に測量杭を設置し、10日から作業員を投入して遺構の掘削を始めた。18日に重機による排土搬出と2区の調査開始。21日に全景写真撮影。その後、土層用トレンチの掘削等を行い27日に隣接建物の工事用足場からの写真撮影を行い、28日に現場作業を終え撤収した。

2 調査の概要

調査地点は解体後の更地で周囲よりやや下がった状況であった。周辺の標高は南側の歩道で標高4.65m、西側で4.47mほど、調査区外は矢板南で4.6mである（図3）。遺構面は標高3.4mほどの砂丘面で、特に西側に大きな搅乱が入っていた。そのうち西端の南北方向のものは試掘トレンチである。

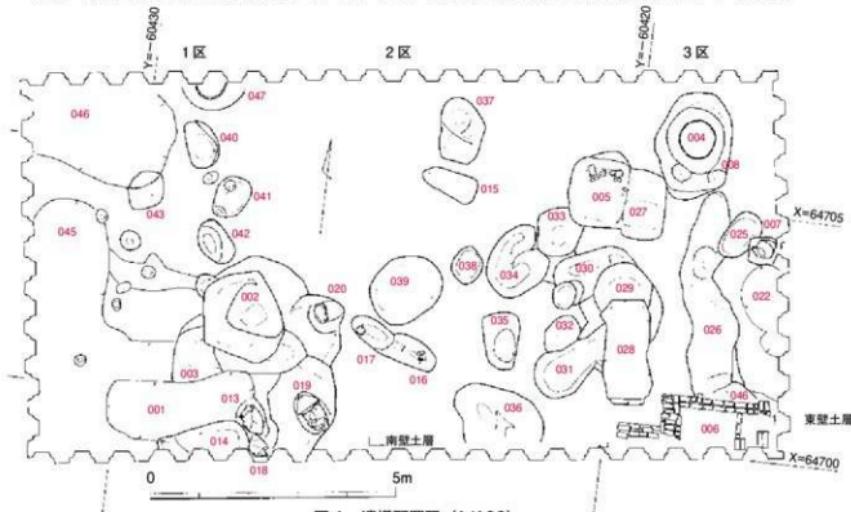


図4 遺構配置図 (1/100)

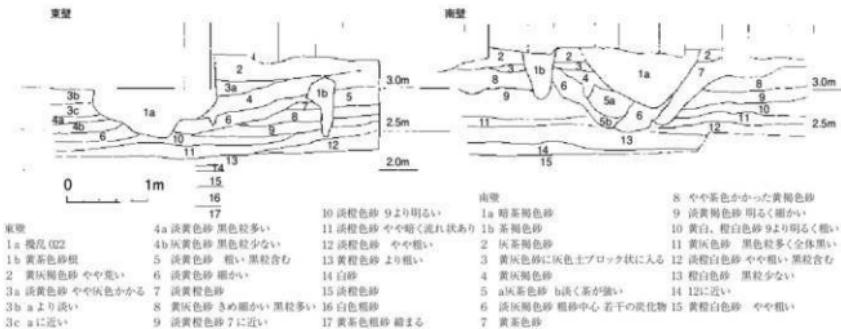


図5 東壁・南壁土層図 (1/60)

遺構面は擾乱土壌を除去した黄白色から白色砂で、西側には大きな擾乱001、046、試掘トレンチ(045)があり重機で除去した。調査区の北側は当初から白色砂が露出し遺構状のプランが見えたが、南側は暗褐色、茶褐色、黄茶色など多様な色調の砂が広がり、手作業で下げるながら遺構検出を行った。

確認した遺構は弥生中期の中型壺棺墓5基、弥生土器が出土する土坑3基、古墳時代の土坑3基、近現代の土坑1基などである。7世紀後半の土坑からは釣り針等の鉄製品が出土した。このほかに砂質、色調の違いから掘削したものの遺物の出土がないものが多くあった。また擾乱001は壺棺墓、土坑が集中する箇所を切っており、弥生土器が出土した。擾乱022は近現代の陶器等が出土したが取り上げない。擾乱028、瓦井戸047も同様である。南東部に煉瓦基礎の一部が残っており、SX006とした。遺構の調査終了後には全体を標高2.3mまで掘削したが、遺構遺物は確認できなかった。

3 土層

土留矢板内の表土を遺構検出面まで搬出したため、示すことはできるのは遺構面以下の土層のみである。図5は東壁、南壁で位置は図4に示した。調査区東端では標高3.4mで遺構検出を行っており、東壁2層にあたる。土層名称では黄灰褐色砂としているが平面では淡い黄白色の砂である。以下は10から20cm幅で色調、砂粒径などの違いで分けたが、人為的な影響は見られない。全体に北、東に緩やかに下がる。標高1.8m以下の東壁16、17層では粒径が大きくなる。巻末にふれるが、東側に隣接する25次調査との遺構面のレベル差があり、そのこともあって図を示した。

4 壺棺墓

弥生時代中期の壺棺墓5基を確認した。いずれも中型棺で大型棺は見られない。ST007が東端で出土したほかは、西側の3区南側から2区に集まり、当初の遺構検出面より低い標高3m以下で棺を確認した。西側には擾乱001があり壺棺墓が削平された可能性はある。実際に擾乱001からは弥生土器片が出土している。25次調査では標高2.5m以下で確認したものが多く、1.7mでの検出もあった。このため、調査終了後に標高2.3mまで全域を掘削したが、遺物の出土もなかった。高い位置にあつたものは削平された可能性もあるが、分布の傾向は示していると考えられる。壺棺内下部の埋土はふ

るいにかけたが遺物は確認できなかった。

ST007 (図6) 調査区東端で砂層に露出した壺を確認した。検出面は標高 3.4 m で、今回出土した壺棺では最も高い位置である。中型の単棺で鋤先口縁の壺を使用する。墓壙はわずかに灰色かった黄褐色砂を埋土とし、北側はSK025を切り、南側を擾乱022に切られ、東側は土留矢板に切られる。棺の埋置角度は 35° と強く傾斜し、主軸方向は N-130°-W である。棺は口縁部の北西側以外を欠く。胴部の一部が割れていたが、形を維持して出土した。

1 は鉢形口縁の壺で器高 50cm、復元口径 35.5cm、胴部最大径 41cm ほどである。口縁部の一部、頸部の 3/4、胴部の全体が残存する。外面および内面頸部上部は黒塗りを施しているようで外面は黒褐色、内面は薄く黒灰色である。内面下部は淡黄色である。口縁部はやや丸みを帯び、外端には細い刻目を施す。器面調整は外面は横方向の磨きで胴部に痕跡が良く残る。頸部は基部に搔き目状の刷毛目を施した後に縱方向に暗文を研磨工具で施す。胴部には最大径部からやや上に 2 本の細い三角突帯を貼り付ける。内面は丁寧なで調整で滑らかに仕上げる。頸部下部には齧歯類によると思われる門歯痕がみられる。中期前半、須玖 I 式。

ST013 (図7・8) 調査区西側で、擾乱001の東壁で断面を確認した(写真6)。中型棺で壺の合口で上壺が下壺に入る呑口である。上壺は小型の鉢で下壺は中型の壺である。上壺は胴部下半を、下壺は口縁部から胴部上部 1/3 を擾乱001に切られ、001から出土した破片と接合した。掘方埋土は地山の砂が黄白色であるのに対しやや黄色が強く灰色かった砂で判り難い。平面形は棺に接した梢円形だが不確かである。埋置角度は 10° ほどでわずかに傾斜する。主軸方向は N-50°-W である。

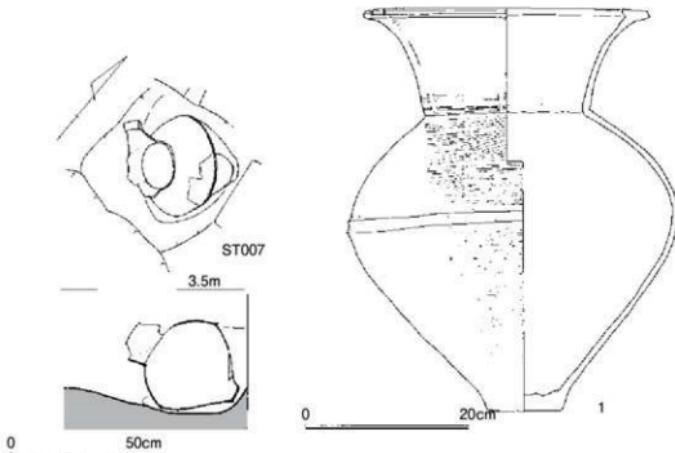
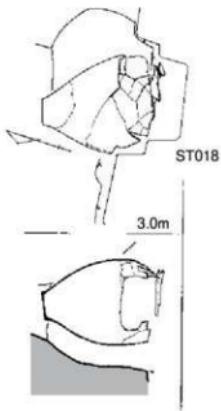
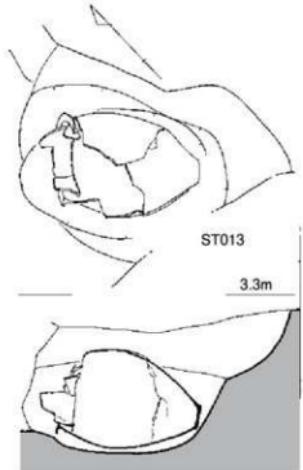


図6 ST007 実測図、出土壺棺実測図 (1/20・1/6)



0 50cm

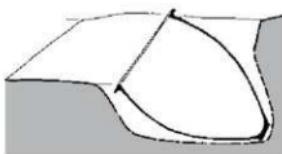
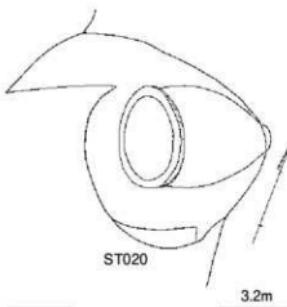
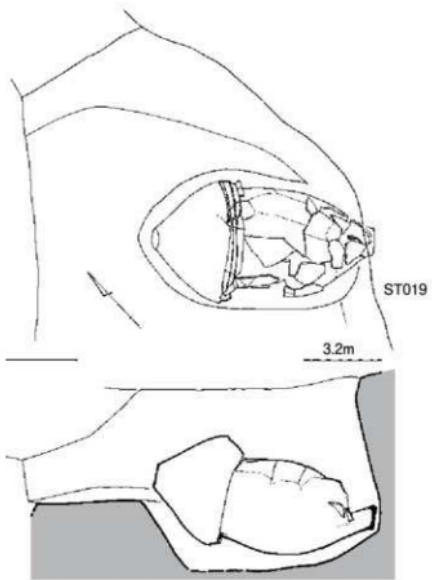


図7 ST013・ST018・ST019・ST020 実測図 (1/20)

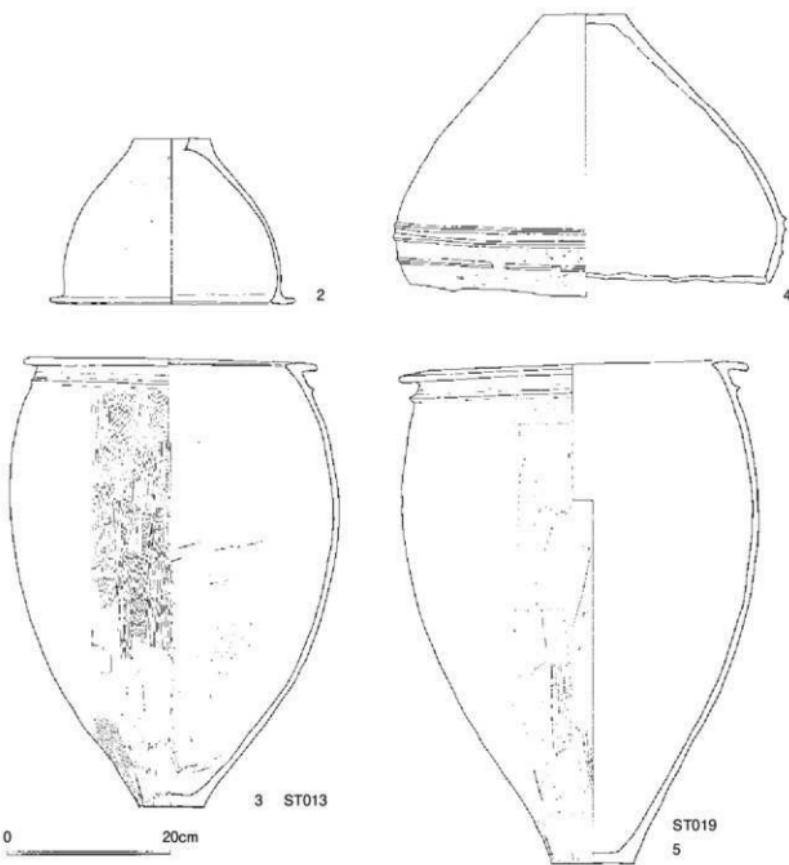


図8 ST013・ST019出土壺実測図 (1/6)

下壺は攪乱による削平以外は形を保った状態であった。

2は上壺の錐形口縁の鉢で口縁部の4/3が残る。口縁部径30.4cm、器高20.5cmほどである。外面胴部は縱方向の刷毛目を密に施し、口縁部はなで、内面はなで調整を施す。内外面は橙色で器面がやや暗い。口縁部に黒斑がみられる。口縁部から胴上部は1/4を除いて器面が荒れ、門歯痕が著しい。そのほかは器面の残りは良好で焼きは堅い。3は下壺の中型の錐形口縁の壺である。口縁部径36cm、器高55.6cmほどである。口縁部はやや丸みがあり、口縁下には断面三角形突帯を貼付する。外面胴部には縱方向の刷毛目調整を密に施し、突帯から口縁部は横なでである。内面は刷毛目調整で底、胴部下位、上位に調整の起点があり、上に描き上げたと考えられる。底、上位の起点は横に直線的な木口痕が明瞭だが、胴下位は丸みがある柔らかく当てたような起点である。刷毛目は浅く、木目は粗で木口の幅3cmほどである。スヌが外面全体に付着する。黒塗りか。一部の口縁部から胴上部にかけてに

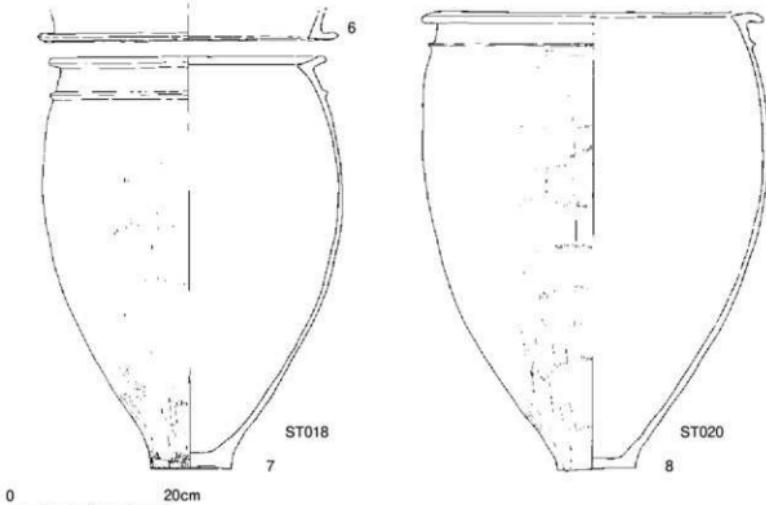


図9 ST018・ST020出土壺棺実測図 (1/6)

門歯痕が集中する。

ST018 (図7・9) 調査区西側で、ST013の南に接し、SK005に切られる。合口の接口壺棺だが土留矢板に切断されて、北側の棺は胴部上部から2/3が削平され、南側の棺は口縁部の一部のみが残存する。ST013の下壺底部とは同レベルで接し、切り合いは不明である。北側は中型の壺で、南側も同様と考えられる。掘方埋土は灰色かかった黄色砂だが判り難い。埋置角度はほぼ水平で、図上では2°ほど傾くようでもあり、ST013との位置関係からしても南側から挿入した方が自然である。主軸方向は南を上とすればN-162°-Eである。北壺は攪乱による削平以外は東側の胴上部が割れて落ちた以外は形を保った状態であった。

6は南壺の彌形口縁の壺で残した1/10からの復元である。復元口縁部径は37cmほどである。外面は黄橙色で内面はやや鈍い色調である。外面に横なでを施すが器面は荒れている。7は中型の壺で全体に土圧により歪んでいる。口縁部の1/4、胴上部の2/3が残る。器高は51cmである。口縁下に三角突帯を施し、横なで調整を施す。突帯下の胴部には縦方向の刷毛目を密に施し、底部付近には木口痕がみられる。外面は胴部下部1/3を除いて煤がみられ、内面上部にも薄く黒色ススがみられ黒塗りを施したものと考える。底部外面の2/3に黒斑がみられる。内面は化粧土を施したようで橙色かかる。突帯のやや下から口縁部は器面が摩耗し門歯痕がみられる。

ST019 (図7・8) ST013の東側に茶褐色かかった砂を埋土とする土坑を掘削する過程で確認した。土坑は東側の黄白色砂の地山と区別できる。墓壙であろう。ST013との切り合いは確認できていない。上壺は肩部を打ち欠いた壺、下は壺の合口壺棺で、上壺の打ち欠き部分と下壺の口縁部がほぼ同じでちょうど接する。上壺はほぼ形状を保ち、下壺は胴部の上側が割れて落ちていたがほぼ完形に復元できた。後世の攪乱は受けていない。埋置角度は10°でわずかに傾斜し、主軸方向はN-47°-Wである。

4は上窓の壺で、最大径部やや上で打ち欠く。全体が残る。打ち欠き部の径44cm、器高35cmほどで最大径部に3条の三角突帯を貼付する。下2条と上1条にはやや間がある。突帯付近には横方向の研磨痕が残り、突帯が剥げた部分にも見られる。その他の部分は外表面とも器面が荒れる。外表面はススが付着し黒褐色で、黒塗りと考えられる。下部は荒れているため不明。外面は黄橙色、内面はにぶい橙色である。5は下窓の壺ではば完形に接合した。口径43.3cm、器高は62cmである。外面の口縁下に高い三角突帯を貼付し横なでを施す。突帯の下は縱方向の刷毛目調整が密に残る。外面と内面口縁直下にはススが付着し、最大径からその下付近に多い。下部1/3は所々に見られる程度である。黒塗りか。内面はなで調整で口縁部下に木口痕がみられる。

ST020 (図7・8) 調査区中央2区の西側でSK002に切られる淡茶色砂中に口縁部を確認し、これを墓壙として掘削した。遺構面から25cmほどで口縁部全体が露出し、掘り方西側は平坦面となる。甕棺はこれをさらに掘り込み設置される。中型の単棺で、埋置角度は34°と傾斜があり、主軸方向はN-110°-Wである。

8は壺でヒビが入るが完形である。口径42.3cm、器高56.7cm。外面口縁下に細い三角突帯を貼付し、小さく鋭い刻目3つ単位を反対側の位置の2ヶ所に施す。突帯から口縁部には横なでを施す。胴部外面は縱方向の刷毛目を施し、全体にススが付着するが、底部近くは一部のみである。内面はなで調整である。外面は浅黄色、内面はにぶい黄橙色である。口縁部平坦部には門歛痕がみられる。

5 土坑

甕棺以外の遺構を土坑として一括する。黄白色、黄褐色の砂層に茶色、暗褐色の砂が掘り込み、またはくぼみ状に溜まった箇所を遺構としたが遺物が出土するものは少ない。生痕や上部からのしみこみによって色調が変わったものもある。以下、弥生時代、古墳時代の遺物が出土したもの、近現代のもの、無遺物の順で取り上げる。

SK016・017 (図10・11) 調査区中央で確認した東西方向の溝状に連なる遺構で、途中やや平面プランがずれ、底が上がるため二つの土坑の重なりの可能性がある。東側を016、西側を017とした。全長190cmで、幅50~55cm、深さ27cmほどである。埋土は淡茶色砂で西側端部のみ暗く別遺構の可能性がある。調査区中央に溜めた排土を重機で搬出する際に一部茶褐色砂を掘削し016の直上から須恵器の坏身12・13が出土した。016は検出面のレベルで須恵器の坏身11に蓋10が付された状態で出土した。本来重なっていたと考えられる。重機掘削時に出土した坏身蓋もこの横付近にあったものであろう。その下10cmほどには楕円形の礫と、釣り針、刀子などの鉄器がまとまって出土した。鉄器は礫の上に乗るものと下から出土したものがある。須恵器とは7cmの比高差があるが、すぐ下の位置である。狭い範囲のまとまりは何らかの容器に入っていたとも考えられる。017の西端では土師器の壺の完形品が正置した状態で出土した。この部分は検出時に円形にやや暗く平面はピット状であり別遺構の可能性がある。須恵器から7世紀後半に位置付けられる。土師器の壺も古い時期である。016・017とともに墓の可能性がある。

出土遺物 9は017西端で出土した土師器の壺で、丸平底で口縁部はやや高さが異なる。口径18cm、器高18.5cmほどである。外面は深い刷毛目が密に残り、口縁部は横なでを施す。内面は削りである。10から13は須恵器の坏身と蓋で、10外面には自然釉がかかり他個体の須恵器小片が付着する。14~16は長楕円形の礫である。14は安山岩で長さ5.4cm、56.1gで片面全体に荒れまたは敲打による凹凸がみられ他は平滑な自然面である。15は花崗岩で長さ6.5cm、91.2gで全体に平滑だが、片面が平らで使用による可能性も残る。16は玄武岩で長さ5.75cm、57.1gで全面平滑な自然面である。

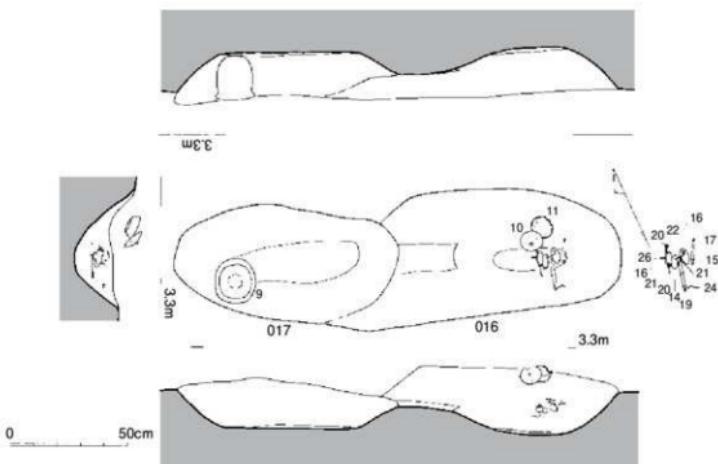


図10 SK016・017実測図(1/20)

釣り針等と一緒にいた状況から漁労に関連する用途であろうか。17から26は鉄製品で20、26が礫の下から出土した以外は礫の上からの出土である。錆びで詳細が判然としない。X線写真を参考にした。17は刺突具が2本付着し、基部側は3方に木質が囲う。四角い筒状に入っていたのであろうか。長い方は断面方形で長さ11.5cm、さなぎが付着する(写真27頁)。短い方は木質に隠れるが5cmほどであろう。19は刀子で全長14.0cm、刃の先端はやや曲がり、柄部の端部には木質が残る。20は刺突具で先端を尖らせ、反対側は折り返して輪を形作る。中央部には一部木質が直交する2辺に残る。断面方形で全長12.0cm。21から23は釣針である。21は完形品で全長4.8cm、軸部には繊維が巻かれる。逆刺は見えない。22、23は軸部を欠くが21とはほぼ同様の形態である。24は軸端部を曲げて小さな輪を作る。釣り針としては曲がりが浅い。25は先端を尖らせた棒状で釣り針の未完成品か。26は釣り針より太く、両端を欠いている。

SK002(図11)西側1区の擾乱001の北側に黒色から灰褐色砂の広がりがあり、遺構の掘り込みが想定された。SK002はその中で最も暗い色調の砂を埋土とする。平面180×160cmの不正円形、2段掘りで深いところで深さ60cmほどを一つの土坑としてとらえた。暗い埋土は除去したものの、壁は茶色から淡茶色ではっきりした黄白色砂ではない。本来の形態を掘られたのか、また遺構であるのか疑問が残る。細かく削れた弥生土器片が出土した。

SK003(図12)SK002と擾乱001の間の薄い茶色土上に弥生土器の小片が固まって出土し、この茶色土を埋土とする遺構を想定していた。SK002掘削後、黄白色を地山とする長さ270cm、幅140cmほどの平面不整長楕円形の土坑を確認した。深さは65cmである。中央部は掘り過ぎで失っている。

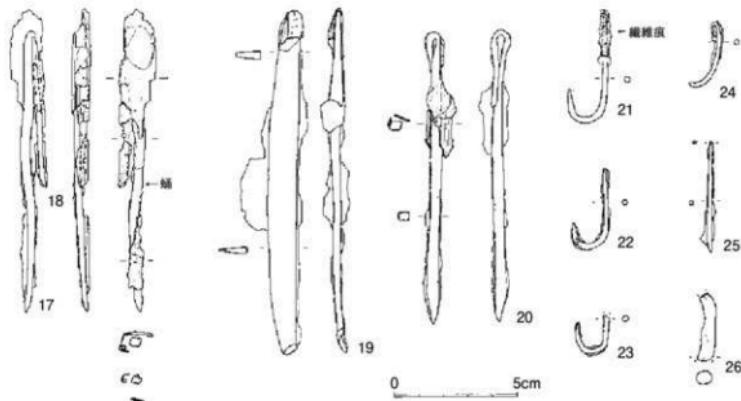
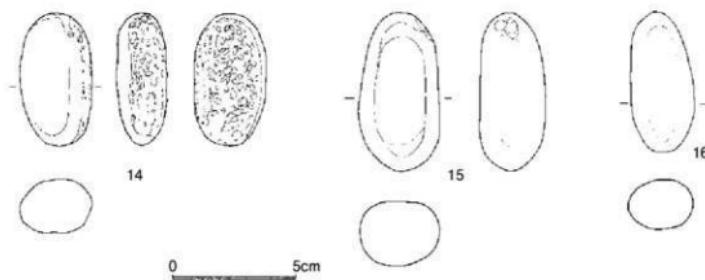
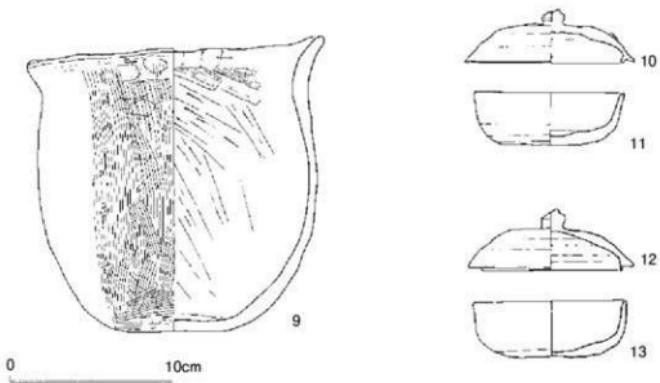


図 11 SK016・017 出土遺物実測図 (1/3・1/2)

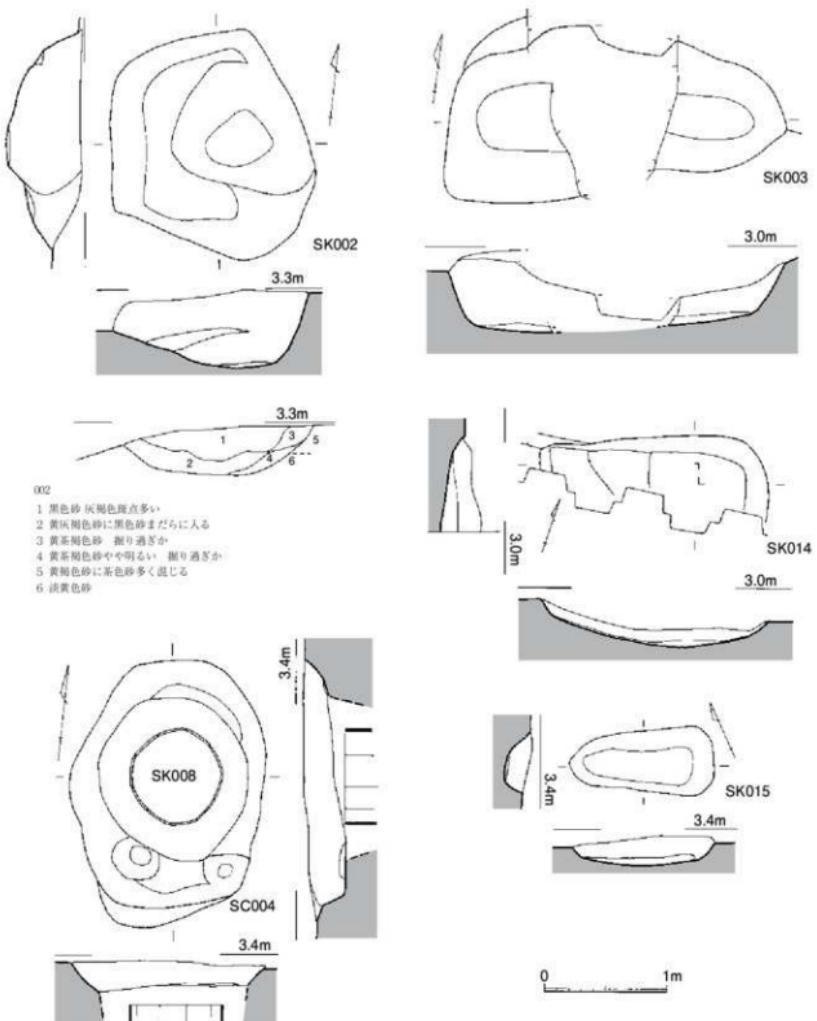


図 12 土坑実測図 1 (1/40)

木棺墓などを考えたが積極的な根拠はない。遺物は検出時の小片のみであるが、SK003として掘削したプランの北側斜面に弥生中期の壺の底部30が出土している。この遺構に帰属するかわからないがここで取り上げておく。

SK008・SE004 (図 12・13) SK008 は調査区北東隅で検出した土坑で、平面形は長さ 218cm、幅 158cm ほどの楕円形で深さ 30cm ほどが残る。覆土は灰色砂である。中央には瓦井戸 SE004 によって攪乱されている。埋土からは弥生中期の壺の肩部片 27 が出土した。外面研磨調整で内面には木口痕が残る。27、28 は SE004 出土の壺で 1/6 からのやや強引な復元である。外面最大径部に低い三角突帯を貼付し外表面は横方向研磨で平滑に仕上げる。27 は 28・29 と色調、調整、胎土が似ており、同一個体の可能性もあると考え一緒に図化した。

SE004 の井戸枠は 10 枚の瓦で直径 70cm の規模で、掘方は径 120cm ほどの円形で裏込めは粗砂である。32 は井戸枠のいぶし瓦で 25cm × 20cm、厚さ 2.7cm ほどの大きさである。33 は井戸枠内から出土した手抜成形の煉瓦で砂を多く混ぜたコンクリートが付着する。法量は 23 × 11 × 6.3cm である。

SK014 (図 12) 調査区西南端で検出した土坑で、北側を攪乱 001、南は土留矢板で切られる。黒色砂を埋土とし、東西 185cm、南北は 60cm が確認できる。底は東側が下がり深さ 38cm ほどが残る。確認調査で検出した遺構である。遺物は出土していない。埋土には径 2 cm ほどの生痕が多数みられる。

SK015 (図 12・13) 調査区中央北側で検出した浅い土坑で、長さ 116cm、幅 54cm、深さ 20cm の規模である。土師器の小片が出土した。31 は土師器の壺の底部で外表面は刷毛目が明晰に残り、内面は削りを施す。器壁は薄めで古墳時代のものである。

SK005 (図 14) 調査区北東で確認した土坑で平面 140 × 115cm の長方形で深さ 57cm である。埋土は暗褐色の砂混じり土で炭化物を多く含む。下部は白色砂と混ざっていた。上部北側では 40 から 50 cm 大の角礫 2 個の下から遺物がまとまって出土した。34 から 38 が同じ器形の鉢で 34、35、37 は完形品である。口径は 17.1 ~ 17.4cm、器高 6.0 ~ 6.5cm と微妙な差があるがほぼ同じである。内面と外表面部に施釉し口唇部はふき取る。34 は内外面ともに釉は濃い赤茶色に釉を施すが、他は内面のみか外表面は極めて薄い。35、36 は淡い橙色で異なる。外表面部には回転削り痕がはっきり残り、底は糸切りである。見込みには同じ陽刻がみられる。また内面部には縦または斜め方向の浅い傷が多く残る。内容量は 500cc ほどである。まとまった出土であり、何らかの生産に使用した容器、型が想定されよう。燭鉢、蠟皿とされるものに類似し、そうであればこの地で生蠟の生産をしていた可能性がある。写真 32 は傾いて出土した 37 が夜中に猫が倒した後の状況である。39 は埋土出土の肥前系の磁器で壺か。草文がみられる。40 はスレート材で繊維質を含む材の外表面に砂が付着し、内面は煤ける。41 は煉瓦で大きさは 23 × 11 × 6cm で橙色から茶色を呈す。手抜成形で両平手に縦方向の擦痕を全面に施す。他に上部から明治 10 年の 1 錄銅貨が出土している。時期は昭和期であろうが詳細は詰められなかった。東に一部重なる SK027 は平面長方形で灰白色砂に灰褐色土が混ざる覆土で 005 に近くまた切られる。遺物は出土していない。

以下は埋土の違いから掘削したが遺物が出土しなかった遺構である。

SK025 (図 15) ST007 に切られる。100 × 60cm の平面楕円形で深さ 16cm。覆土は淡黄色砂。

SK026 (図 15) 東西に溝状に延びる。幅 100cm、深さ 21cm ほどで覆土はくすんだ灰黑色砂。

SK029 (図 15) 平面楕円形のくぼみ状で 170 × 120 × 31cm の規模で覆土は黄茶褐色砂。

SK030 (図 15) 平面楕円形で攪乱に切られる。170 以上 × 170 × 30cm で覆土は黄茶褐色砂。

SK031 (図 15) 溝状で攪乱 028 に切られる。190 以上 × 97 × 33cm の規模で覆土は暗茶色砂。

SK032 (図 15) 平面略円形で 90 × 70 × 12cm の規模で覆土は暗茶色砂。

SK033 (図 15) 平面略円形で 100 × 95 × 20cm の規模で覆土は暗褐色砂である。

SK034 (図 15) 平面円形で 140 × 120 × 18cm の規模で覆土は暗褐色砂である。

SK035 (図 16) 平面略楕円形のくぼみ状で 116 × 72 × 24cm の規模で覆土は黒褐色砂。

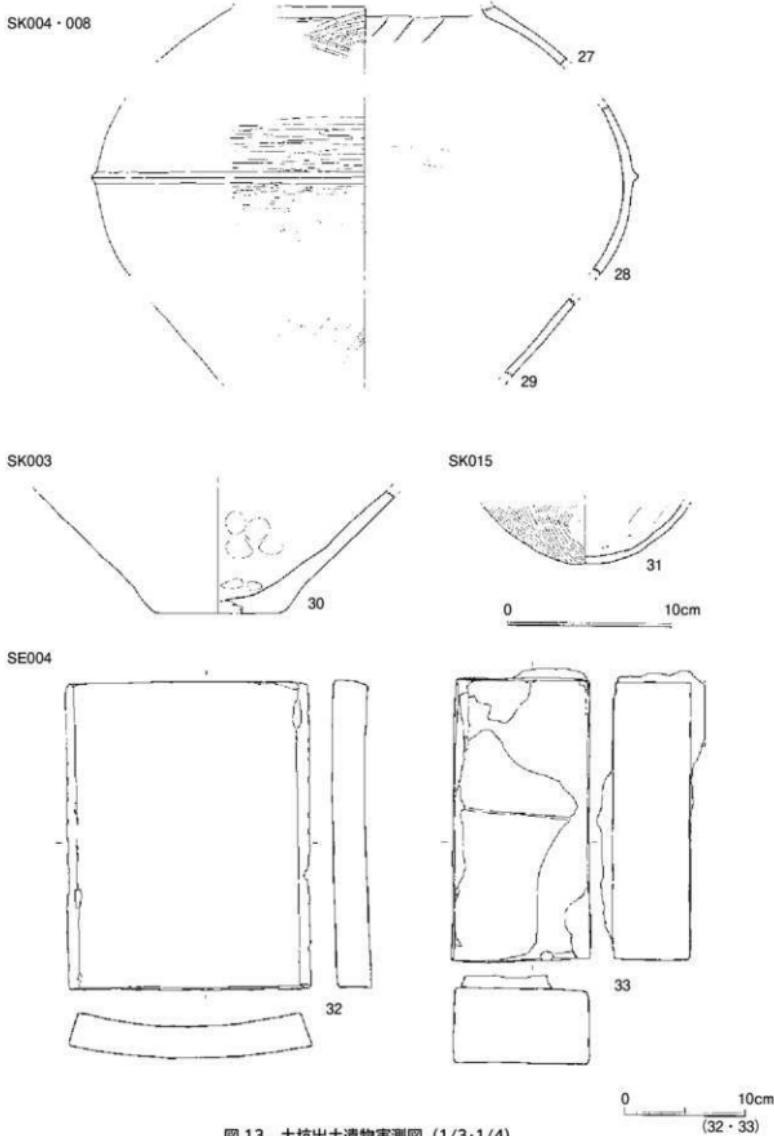


図 13 土坑出土遺物実測図 (1/3・1/4)

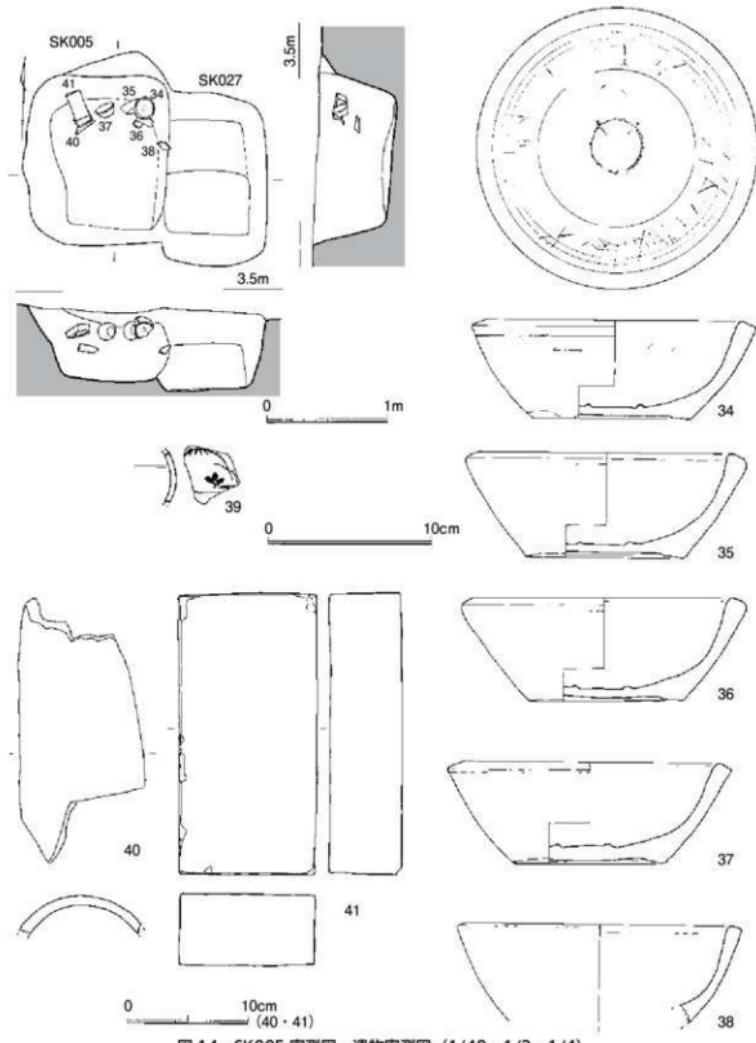


図 14 SK005 実測図・遺物実測図 (1/40・1/3・1/4)

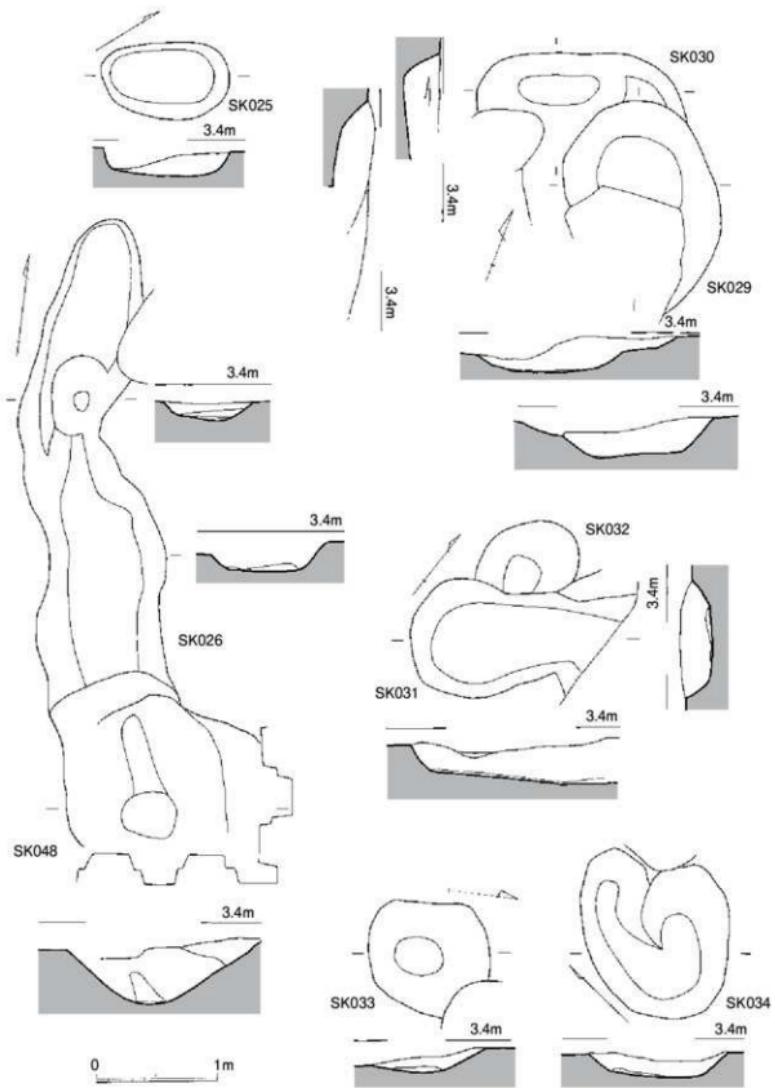


図 15 土坑実測図 2 (1/40)

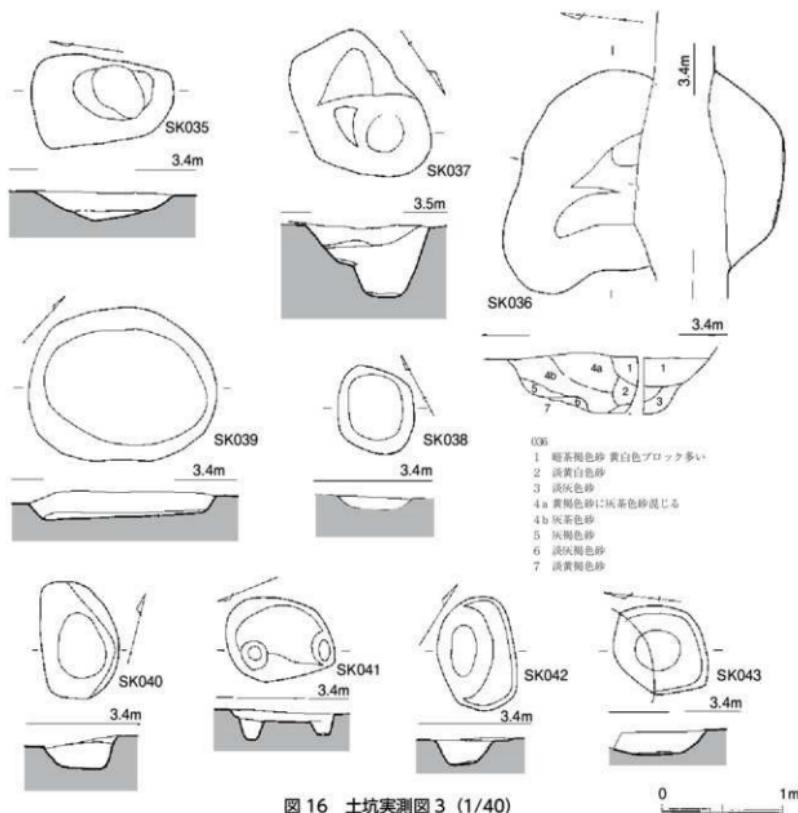


図 16 土坑実測図 3 (1/40)

0 1m

SK036 (図 16) 丸い平面形の南側は矢板で切られる。200 × 120 以上 × 60cm の規模を掘削したが、土層図の1層とそれ以下は別の掘り込みと思われる。遺構と考えたが遺物はない。

SK037 (図 16) 平面略楕円形で 128 × 90 × 58cm のピット状で中央に根がありその影響か。

SK038 (図 16) 平面円形のくぼみ状。覆土は黒褐色砂だが質は地山同様に締まる。

SK039 (図 16) 平面円形の大型のくぼみ状。覆土黒褐色砂だが質は地山に近い。154 × 124 × 11cm の規模である。

SK040 (図 16) 平面楕円形のピット状。95 × 64 × 16cm の規模で覆土は淡茶褐色砂である。

SK041 (図 16) 平面楕円形の浅いくぼみの底に小ピット。90 × 70 × 10cm の規模で覆土は淡茶褐色砂である。

SK042 (図 16) 平面楕円形のピット状。95 × 64 × 25cm の規模で覆土は淡茶褐色砂である。

SK043 (図 16) 平面円形のピット状。73 × 73 × 18 cm の規模で覆土は淡茶褐色砂。

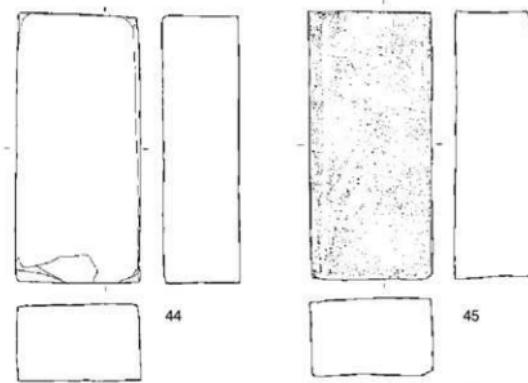
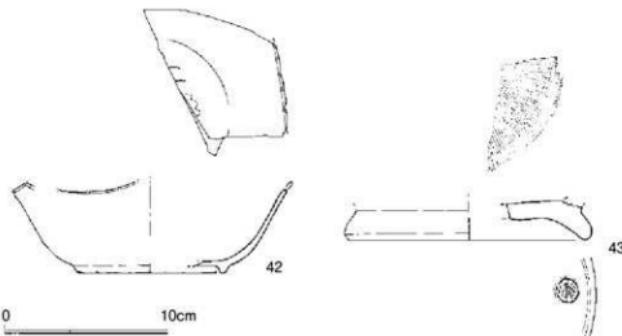
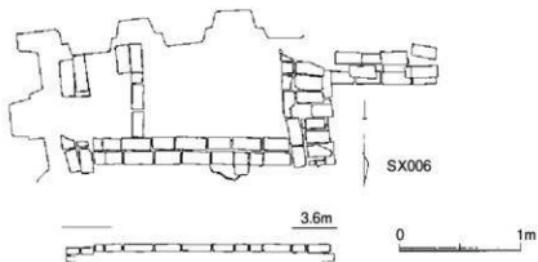


図17 SX006 実測図・出土遺物実測図 (1/40・1/3・1/4)

46号、49号器皿的口部均饰有凸起的唇沿，器身直壁，底部略向外撇。器底平滑无足。器身饰有弦纹，腹部有对称的乳钉纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。

47号器皿的口部有凸起的唇沿，器身直壁，底部略向外撇。器底平滑无足。器身饰有弦纹，腹部有对称的乳钉纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。

48号器皿的口部有凸起的唇沿，器身直壁，底部略向外撇。器底平滑无足。器身饰有弦纹，腹部有对称的乳钉纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。

49号器皿的口部有凸起的唇沿，器身直壁，底部略向外撇。器底平滑无足。器身饰有弦纹，腹部有对称的乳钉纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。

器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

7. 其他器物

10号器皿为大口深腹的砂质陶盆。器身直壁，腹部有对称的乳钉纹，腹部饰有弦纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

11号器皿为大口深腹的砂质陶盆。器身直壁，腹部有对称的乳钉纹，腹部饰有弦纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

12号器皿为大口深腹的砂质陶盆。器身直壁，腹部有对称的乳钉纹，腹部饰有弦纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

13号器皿为大口深腹的砂质陶盆。器身直壁，腹部有对称的乳钉纹，腹部饰有弦纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

14号器皿为大口深腹的砂质陶盆。器身直壁，腹部有对称的乳钉纹，腹部饰有弦纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

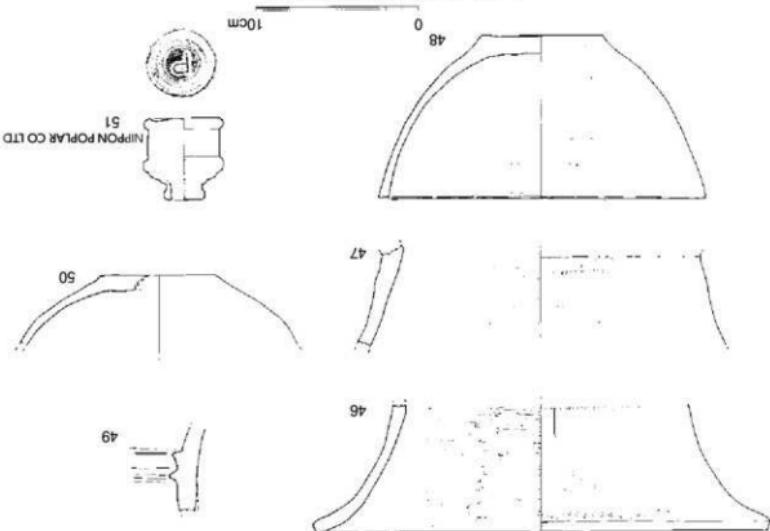
15号器皿为大口深腹的砂质陶盆。器身直壁，腹部有对称的乳钉纹，腹部饰有弦纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

16号器皿为大口深腹的砂质陶盆。器身直壁，腹部有对称的乳钉纹，腹部饰有弦纹。器盖呈圆球形，盖面饰有凸起的乳钉纹，盖缘有环形凹槽，盖内有突起的柱状支撑。器盖与器身合口处有环形凹槽，可套合。器盖的盖顶、器身直壁、器底及器盖的出土方向一致。器盖的盖顶朝上，器身直壁朝外，器底朝下。

SX006 (图17) 图的2号为平底陶罐，器身直壁，底部略向外撇。器底平滑无足。器身饰有弦纹，腹部有对称的乳钉纹。1~3段

6. 碗豆形器

图 18 其他器物素面图 (1/3)



シャープな成形である。斐棺墓に使用したのであれば小型棺の上壺だろうか。49は弥生中期の壺の胸部で2条の三角突帯を貼付する。中型棺のものであろう。50は弥生土器で鉢または壺の底部で1/4からの復元。器面は荒れているが外面に刷毛目が見られる。鈍い黄橙色である。51は西端の擾乱出土のガラス瓶で側面に NIPPON POPLAR CO LTD、底にはおおきく P の浮文がある。ガラスは透明で若干の気泡がありやや歪む。株式会社日本ボプラのインクの瓶である。このほかに遺構検出中に黒曜石の小剥片2片が出土した。

8 終わりに

弥生時代中期、古墳時代、近現代の遺構・遺物が出土した。

弥生中期の斐棺墓は図19のように、これまでの調査範囲では北端に位置する。今回および25次調査地点でも調査区の北側に斐棺墓はないが、砂丘面レベルは大きく下がることもない。ここで斐棺の検出レベルを確認する。今回の調査では最も高いST007を標高3.4mで確認した。南側の道路部分での1次調査では標高3m前後、西に隣接する33次調査では3.1mで斐棺本体が露出している。東に隣接し今回に最も近い25次調査は、遺構面が2.5mで深いものでは2m以下で斐棺が出土している。土層図でみた緩やかな砂層の傾斜が遺構面にも対応するかはわからないが、25次とは斐棺の比高差が大きく、調査時の基準レベルが異なるのではないかと考える。藤崎交差点から東・北東側の区画での調査範囲では、斐棺出土の標高に大きな違いはなく、分布が北に広がる可能性はまだあるだろう。ただし密度は低いと考えられる。

SK016は7世紀後半の良好な一括資料である。隣接する調査区ではこの時期の遺構はないが、砂丘南側斜面では7世紀代の堅穴建物などが出土している。古代の釣り針は海ノ中道遺跡で多量に出土しているが市内での例は少ない。墓の可能性が高い。

近現代では煉瓦積、SK005がこの地での営みを特徴づける。この場所は昭和13年の地図に「前山木炭」と記載され関連も想定されるが具体的なことはわからなかった。



図19 藤崎遺跡出土斐棺墓分布図 (1/1800)



(1) 対象地北側 西から



(2) 調査区全景 西から



(3) 1区全景 南から



(4) 2区全景 南から



(5) 3区全景 南から



(6) 撹乱 001 北西から 中央に ST013 が見える



(7) 1区堀・土坑群 北西から



(8) 3区全景 北西から



(9) 2区 北東から



(10) ST007 南西から



(11) ST013 北東から



(12) ST019 南西から



(13) ST018 北西から



(14) ST020 北から



(15) 1区唐棺墓 西から



(16) ST013・018 西から



(17) ST013・018 南東から



(18) SK002・003 西から



(19) SK003 北から



(20) SK002 南から



(21) SK002 東西土層 南から



(22) SK014 挖削前 北西から



(23) SK014 北西から



(24) 東壁土層



(25) 南壁 SK036 土層



(26) SK016・039 検出時 南東から



(27) 2区全景 北から



(28) SK016・017 南から



(29) SK016 遺物 南東から



(30) SK016 下部 東から



(31) SK017 北から

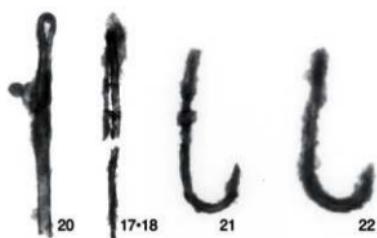


(32) SK005 南から



(33) SX006 北西から





21 図 11 繊維痕



17 図 11 虫

報告書抄録

ふりがな 書名	ふじききいせき 22 藤崎遺跡 22							
ふりがな 副書名	藤崎道路第39次調査報告							
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第1463集							
編著者名	池田祐司							
編集機関	福岡市教育委員会							
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8番1号							
発行年月日	2022/3/24							
ふりがな 遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因	
藤崎遺跡	早良区百道1丁目 807番10	40137	307	33度34分54.29秒	135度20分54.29秒	20200210 ~ 20200228	113	共同住宅
所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
藤崎遺跡第39次	墓地・集落	弥生時代中期・古墳時代、現代	斉柏墓、土坑	弥生土器、土師器、須恵器 鉄製釣針・刀子・鉢皿				
要約	砂丘頂部の北側に位置し、隣接する調査地点では小型の斉柏墓が出土している。地表下12mほどの標高3.4mの淡黄色砂層上で遺構を確認した。実際にはさらに高いレベルが遺構面と考えられる。確認した遺構は斉柏墓5基、遺物を含む土坑7基、遺物を含まない土坑群である。 斉柏墓はいずれも須玖式の中型棺で壺の單棺1、壺の單棺1、壺・壺の合わせ口1基、壺・壺の組み合わせ1基、壺・鉢の組み合わせ1基である。骨は残っておらず、副葬品もない。このうち4基は調査区南西寄りに集まる。斉柏墓域の北限に近いと考えられる。 土坑は茶褐色、黒褐色等の砂を覆土とするがいずれも遺物が少ない。その中でSK016からは須恵器Ⅷ崩壊・蓋と釣り針、刀子等の鉄器がまとめて出土した。また連続するように接するSK017からは土師器壺の完形品が正置した状態で出土した。このほかにSK005は陶器の鉢5点、明治10年の1銭銅貨などが出土している。 これまで、砂丘北東側は急に落ちる印象があったが、やや下がるもののは急な傾斜はない。斉柏墓の集中する範囲からは外れるかもしれないが、古代も含め、遺構はさらに伸びると考えられる。							

藤崎遺跡 22

藤崎遺跡第39次調査報告
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1463集

2022(令和4)年3月24日発行

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号
印刷 高松印刷有限会社
〒812-0062 福岡市東区松島1丁目4-10